

培
育
人
才
の
行
列



エンジン

柳井義男は、人生のあらゆることに対し疲れきっていた。大学を卒業して新卒で就職したが、その会社は一年後の不景気の煽りを食らってすぐに倒産の危機に陥り、退職を余儀なくされた。次に入ったブルーカラー系の作業所でルーチンワーク的な仕事を続けているが、給料は大変安く、おまけに最近そこも業績が悪化し、いつ潰れるか分からぬ状況である。

元来内気な性格の為、大学卒業後はこれといった友人も彼女も出来ず、休日にやることといえば、ネットサーフィンやテレビゲーム。だがそれも飽きてきた。少しだけ勇気を出してバーにも行って見たが、他の客の会話についていけなかった。店のマスターとすらロクに話ができず、周りから「話にくいやつ」という目線が注がれていることに嫌気が差し、一時間で店を出て、それ以降どんな店にも行ってない。そんな義男なので、休日は恐ろしく暇である。仕事も嫌だが、何もすることがない一日も彼にとっては退屈であった。退屈ゆえ、休日の彼の行動は、常に同じであった。

その日の行動も、午後二時までは今までと全く変わらなかった。朝9時頃に起き、髭を剃って歯を磨いて飯を食べ、とりあえずネットサーフィンをする。休日は一日中パソコンに向かい合っただけで過ごすという人もいるようだが、この義男の場合、いつも11時頃にそれを止める。何か違うことをしなければ、何十年経っても同じことをし続けてしまう、という漠然とした不安が、いつも彼を次の行動に進ませるのである。もっとも、その思考すら結局はルーチンワークの一過程に成り果てているのだが。

そうして彼は外に出た。いつものようにとりあえず、人通りの多い場所へ行こうと考えた。電車に乗り、大きな駅で降りる。着く頃には大体昼前なので、近くのうどん屋で親子丼を食べた。ほんのりと甘い玉子と柔らかい肉の美味しい親子丼だったが、記憶に残るほどのものではなかった。飯を食べ終え店を出た後彼が何をするのかというと、ただそこら中を歩き回るなのである。アイドルグッズ専門店やパチンコ屋、ファーストフード店が立ち並ぶ賑やかな駅前通り、そしてそこを行きかう、自分とはまるで異なった生活をしているように見える、明るい男女達を横目で見ながら、同じ所を1時間ほど徘徊する。

何も楽しくはない、ただ虚しいだけなのは義男も理解しているのだが、これが止められない。こうしていると、何か運命的な出来事が起こるのではないか。例えば、70歳程の温厚な老紳士が、「君に財産を譲りたい」と声をかけてきてくれたり、あるいは年下の落ち着いた感じの女性が「私、始めてここに来たんですけど、案内して頂けませんか」と誘ってくれたりという夢を、義男は頭の隅で密かに期待し、また一方ではそれが有り得ないことだと理解していて、ほんの少しの希望と大きな絶望を胸にうろうろと歩き続けているのである。

一時間も同じ場所を徘徊し続けていると、さすがの義男も飽き始める。なので、場所を変える。次の行き先はその日によって違うのだが、今日は駅前通りから少し行った所にある繁華街へ向かった。

まだ昼なので、ほとんどの店は当然閉まっているし、人通りも少ない。そんな寂しい場所でも、義男は平気で徘徊する。灯りのついていない看板や、開店時間の書かれた貼り紙を、義男は一つ一つ、歩きながらしっかりと見る。その行為には全く意味がない。だがその行動が、思わぬ奇跡を生み出すかもしれない、と、彼は無意識に考え、実行している。たまに開店している店があって、客引きの女などが「お兄さん、一杯どうですか？」などと声を掛けてくるが、義男は全く相手にしない。どんな悪いことが起こるのか分からないからだ。彼は出来れば極めて安全で尚且つ労力のいらぬ方法で、奇跡の恩恵に預かりたいのだ。

しばらく歩いたところで、義男の目に雑居ビルの看板が眼に入った。彼はこうした建物の中も丁寧に歩き回る。勿論、店はまだ開いていない。胡散臭いガールズバーも、古臭い会員制バーも、とっくの昔に閉店したおんぼろ扉の元バーも、皆平等に埃と薄灯り漂う空間の中で沈黙している。その中を義男は注意深く、一階一階慎重に、店の看板や床、行き止まりまで観察する。何も起こらないが、彼はそうせざるを得ないのだ。

午後二時、丁度この繁華街を散策し始めてから30分ほど経った時、義男は本日三つ目の雑居ビルの中へ入ろうとしていた。「新中溝ビル」と、壊れかけたプラスチック看板には書かれていた。すぐ近くにはビルの中に入っている店の照明看板が縦に十個ほど並んだ状態で設置されていたが、そのほとんどは破損していて店名が見えない。ビルの壁は所々煤けていて、タールのような黒ずんだものが点々と付着している。

義男はまず一階へと足を踏み入れた。そこでは、いつもの通りであるが、大した出来事はなかった。出来事といえば、乾いた便所のような匂いと埃に鼻をつかれて、くしゃみをしてしまったことと、床にクロゴキブリの死骸が2、3匹ほど転がっていたことぐらいだった。

ビルの外周に設けられた螺旋状の階段を使って二階へ上がった所、義男の目に予期せぬものが飛び込んできた。

そこは今まで彼が見てきたように、埃と軽い刺激臭漂う薄暗い空間ではあったのだが、そのバーの扉の前に、三人の人間が列を作って並んでいた。植物のレリーフが彫られた年代物の扉から見て一番前に並んでいるのは、70代ぐらいのやせ細った男性。歯がかなり抜けているのか、口がしぼんだようになっていて、時折それをモゴモゴと動かしている。その後ろに並んでいるのは、50代の肥えた女性。片手に松葉杖を抱え、時折ふらつきながら、扉の方をじっと見つめていた。一番後ろに並んでいたのは、茶色でロングヘアの20代の女だった。夏だというのに長袖のシャツを着ていて、あちこちをせわしなく見回している。

最初、義男はいよいよ自分の頭がおかしくなり、幻覚でも見たのかと思った。だが、時折手足や口を動かす彼らを見ている内に、それが本物の人間であると実感した。この奇怪な光景に興味を持った義男はしばらくの間、遠巻きに列を眺めていた。だが、何かが起きる気配はない。

列の三人はと言うと、義男の方に振り向きもせず、ずっと前方を見ている。この行列が何なのか、尋ねてみようとも考えたが、義男にとって見知らぬ人間に、ましてやこのような異様な状況の中で声を掛けるということは、繁華街で強面の男に道を聞くのと同じぐらい恐ろしいことだった。

この場の恐ろしさに耐えかねた義男がそっと逃げ去ろうとした時、例の扉が開き、中から男がひょいと顔を出した。目つきの鋭い、鷹のような細い顔をした壮年の男で、首から下ははっきりと見えなかったが、黒いスーツのようなものを着ていた。

「では、次の方、どうぞ」

男が皺枯れた声でそう言うと、一番前に並んでいた老人が無言で頷き、開かれた扉の中へと入っていった。そして、老人が完全に扉の中へと姿を消してしまった時、扉は再び閉じられた。残る二人はこれまでと変わりなく、並び続けている。

義男は列の最後尾に並んだ。特にこれといった考えがあつての行動ではなく、ただ、ひょっとするとこの異様な状況に加わることが、自分を今の苦境から救ってくれるかもしれないと直感してのものだった。

それから更に時間が経ち、涼しい空気と橙色の光が外から入り込んできた。義男と他の二人は依然、扉の前に立ち続けている。義男はこの時になってようやく、前にいる二人に話しかけようという考えを実行に移した。それは恐ろしく勇気がいることではあったが、彼の気弱さではずっとこのまま何も変化がないという状況に耐えられなかった。何を言おうか、しばらく考え込んだ後、思い切って口を開いた。

「すみません、この列、何なんですか」

一番前の中年女性は振り向きもしなかったが、義男のすぐ前にいた若い女がぎこちなく振り向いた。

「え……今、何か？」

「いや、こ、この列、何なのかなって思って……」

少々どもりながら、義男は会話を進めた。背中から汗が垂れるような感覚がする。女も予想外だったのか、目をきょろきょろさせながら、会話に応じてきた。

「す、すみません。わたしも分からないんです」

「じゃあ、何でこんなところに」

「ここらへんをフラフラしてたら、たまたまここに着いちゃったんです。そしたら、人が三人並んでいて」

「丁度、今みたいにですか？」

「あ、はい。前にいるおばさんと、さっき入っていったおじさんと、後、十代後半の高校生っぽい男の子がいたんです。その子は大分前に中へ入っていきました」

「そうなんですか」

「はい……」

会話が止まった。義男は次に何を言えば良いのか分からなくなった。目玉が自然に周りを見渡してしまう。時間帯のせいかわ状況のせいかわ、周りの空気が冷たくなってきたように思えた。

「何で、話しかけてきたんですか」

女が口を開いた。義男はビクッと体を強張らせつつも、なんとか質問に答えようとした。

「な、何で、ですか？」

「す、すみません、変なこと聞いてしまって」

その時、扉がゆっくりと開いた。義男は驚いたが、それを見て彼女もやや驚いたかのように身を震わせた。先ほど同じく、扉から壮年の男が顔を出し、枯れた声で喋った。

「次の方、どうぞ」

中年女性が前に進んだ。扉の中に入ろうとした瞬間、心なしかその顔がほころんだように見えた。彼女の姿が完全に見えなくなると扉は閉じられ、再び長い沈黙が始まった。

「あ、それで……」

夕日すら差し込まなくなり、徐々に辺りが暗くなり始めた頃、義男が口を開いた。

「あ、はい」

義男の声に女が反応した。

「あの、さっきの質問なんですけど、何で話しかけたのかって」

「あ、ああ」

「いや、何でもか特別な理由はなくて、ただ、その、人と話したかったんです」

「人と、話したかったんですか？」

「すみません、変な理由で」

「いえ、その、人から話しかけられたことって、ほとんど無かったので」

そういうと、女は長袖を捲った。女の手首には幾多もの剃刀の傷が残っていた。

「これ、自分でやったんです。学校を出てから嫌なことばかりで、いつの間にかこんな癖がついちゃって」

その生々しい傷跡を見て、一瞬思考が恐ろしさに侵略された義男だったが、同時に頭の中に生まれた憐れみの感情がそれに勝った。

「僕もそうなんです。ずっと嫌なことばかり」

「え、あ、あなたもなんですか？」

「は、はい。すみません、腕は切らないですけど……」

「いえ、何と言ったらいいのかわからないですけど、嬉しいです」

女が目からうっすらと涙が流れた。義男は彼女に対し、ある種の運命的な「縁」というものを感じた。

その時、扉が開き、男が顔を出した。

「次の方、どうぞ」

「じゃあ、私、行きますので……あなたも来るんですね」

「はい……」

「じゃあ、待ってます……向こうで」

そう言い残し、女は扉の中の暗闇へと消えていった。そして扉が閉まり、この空間に義男一人が残された。

それからまた、更に長い時間が経った。日は完全に落ち、この場所は完全な暗闇となった。その暗闇の中で、義男はただ待った。その胸中には、待ちに待った機会に出会うことに対する期待と、それを裏切られはしないかという恐怖の両方があった。周囲の暗黒が、義男の思考をマイナスへと導こうとしていた。

そして、扉が開いた。真っ暗な中に、あの男の眼だけが光っている。

「次の方、どうぞ」

男が奥へ引っ込んだ。後には開きっぱなしの扉のみ。

義男は扉へと近づいた。そして後一步で中に入るという時、反射的に足が止まった。扉の中に漂う闇が、周囲を覆っている闇より、更に深く暗い気がした為だ。

胸中に渦巻いていた不安が、一気に膨れ上がった。そもそも、これが幸運へのきっかけである証拠など何一つとしてない、前の三人がどうなったのかなど、全く分からない。この中へ入ったが最後、地獄のような異界へとへ引きずり込まれ、二度と戻ることが出来ず、扉へ入ったことを永遠に後悔し続けるかもしれない。

あの時、こんな場所に来るんじゃなかった、と――。

義男の足が自然と一歩引いた。その瞬間、扉が勢いよく閉じられた。慌てて取っ手に手をかけたが、扉は二度と開かなかった。

それ以来、義男はずっと、行列を探し続けている。ラーメン屋の行列などを見つけると、もしやと思って並んだりするが、しばらくして、結局あの行列とは異なるものだとして理解すると、すぐ離れてしまう。相変わらず、色々な所をフラフラ歩き、用もないのにビルの中へと入ったりする。その行動には以前とは違い、明確な目的と、そして埋めようのない後悔が付きまとっていた。

(完)

暗闇へと続く行列

<http://p.booklog.jp/book/95913>

著者：エンジン

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/lazeengine/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/95913>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/95913>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ